

名君に仕えて

竹原 宏（岡山県職員OB）

1. 惣津課長と私

故花尾県酪連会長の言葉を借りると、「惣津課長は戦後の岡山県の畜産発展の礎を築いた人だ」と高い評価をされていた。

昭和24年に、農林省の種羊場から故郷の県畜産課長に赴任して来られた。課長は着任早々溢れんばかりの情熱で、畜産振興に取り組んだ。中でも、特に酪農の振興に傾注した。

昭和28年、農林省の大坪畜産局長と三木知事を飛行機に乗せ蒜山上空を飛び、広大な台地と豊富な草資源を見せて。酪農適地を訴え、国の助成を懇請した話は、余りにも有名である。

昭和33年、課長と私は世銀の融資を受けて、美作地方にジャージー牛を導入するため、計画書を持って農林省の審査会に出頭した。

前日、隣の係長から、「課長は酒好きだから、酒を持って行った方がいいよ。寝る時はズボンの寝押しをした方がいいよ。」と細かい気配りの訓導を受けた。私は、サントリーを忍ばせてブルーレインに乗り、課長のお供をした。現場育ちの私は、本庁勤務はルーキーであったから、本省説明会に出席する等は過分の大役であった。有能な課長だから計画書はすべて説明されるものと大船に乗った心算でいた。

会場には10名近い審議官が私達を囲んでいた。会議が始まると質問が矢のように飛んできた。大船が少しゆれる頃、落合町の特産品は何だと、酪農には無縁な質問が出た。課長がすかさず身をおかわし、「竹原説明せよ」と命令された。私は落合には8ヶ月程の駐在で、古見屋の羊かんと川東の花火大会ぐらいしか

の知識しかなかった。小さい声でブツブツと言っていたら、遂に雷が落ちた。「君は落合に小便に行ったのか。」余りに声が大きかったので、審議官が急に話題を変えてくれた。宿に帰ると、「竹原すまん。あれは芝居じゃった。」と平謝りされた。課長の演技に感心した。早速反省会が始まり、飲む程に酔う程に大東亜戦争に花が咲き、昭南島の司令官時代、抜刀して上官を説得した苦労話が出て、多いに盛り上がった。翌朝、残しておいた爛冷ましを飲み、ヨレヨレのズボンを着て農林省に行った。二人とも顔が赤いので、屋上に上がって風で冷やしたが効果がなかった。30分程遅刻した。しかし、孤軍奮闘の甲斐があって、700頭分の融資枠をもらった。

2. 蔵知課長と私

ご存知のとおり、蔵知さんは池田家の名門のご出身で、自ら備わったオーラは一步近寄り難いキャラクターがあった。当時の蔵知さんは酪農通として県内外に名声が高かった。そして、ご多忙であった。

1) 一期一会

昭和39年11月、蔵知校長と私達3人は蒜山のジャージー牛を輸入するために、ニュージーランドに出張した。校長は飛行機で、私達は英国の貨物船（約1万トン）で後を追った。ニュージーランドは世界有数の畜産国である。特に、草地を利用する技術は古い伝統があり、世界一である。所謂、畜産のメッカである。一生の内一度行きたいと願っていた。12日の航海の後に、未明のオークランド港に入港した。甲板に出ると、早春の港は

肌寒かった。朝靄に包まれた港の埠頭にはスズランの燈が美しく並び、タグボートのリズムカルな音が響き、エキゾチックな光景に、私は高揚した。

突然、「オーイ竹原君」と下の方から声がした。蔵知校長と吉田さん（業者）が手を振っていた。身体中に熱いものが込み上げてきた。今が私の生涯で一番幸せなんだと何度の自分に言い聞かせた。一期一会のすばらしい至福の瞬間であった。心の中で校長に感謝した。翌日からニュージーランドを巡り優れたジャージー牛を選び、100頭を購入して、1ヶ月後に蒜山に導入した。

2) 畜産史の編纂

昭和52年の冬、津山の県酪試に勤めていた頃、蔵知さんから呼び出しがあり、岡大病

院にお見舞いに行った。病床に癌との闘病にお疲れのお姿があった。実はライフワークとして県畜産史の編纂を思い立ち資料等若干集めたが、病状が思わしくないで、後の面倒をみてくれないかと言うお言葉であった。ご容体を前にお断りする事も出来ず、大役を引き受けてしまった。帰途自動車の中で、恩師の姿を思い、追憶と交錯し、両頬を伝う滂沱の涙を禁じ得なかった。この後、畜産史は畜産会が中心となり、関係者、関係団体の手厚いご協力をいただき、昭和55年に1,200部を刊行して全国に頒布することが出来た。昔から畜産一家と云う言葉があった。畜産人は同じ釜の飯を喰っているという同族意識の表現である。課長を中心にした堅い絆が畜産振興の推進力になっていたのである。